

じいちゃんからの宿題



越前市坂口地区 【提供：越前市エコビレッジ交流センター】

「魚つりに行くか。」

というじいちゃんの誘いに、

「やったー。」

と、ガッツポーズでこたえた。谷川での魚つりは、一年ぶりだ。

毎年夏休みは、弟と二人で、福井県のじいちゃんの家で一週間過ごすこと

になっている。この村は、里山と言われているところで、たな田の風景が広が

っている。

谷川まで行く山道は一人がやっと通れるはばで歩きにくかったが、木々が

しげっているせいで、町では猛暑だと騒いでいるのにずいぶんとすずしい。木々

を通りぬけてくる風は、緑のにおいがしますがすがしい。ぼくたちの腰にぶら

下げたクマ鈴がにぎやかな音を立て、セミの声と競っている。

「ほしたら、つりざおを選んでやるな。」 ※ほしたら…そうしたら

じいちゃんは竹林のところで、立ち止まると、ぼくらがにぎるのにちょうどよ



出典：独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA)

い竹を選んで、切り出してくれた。糸と針をつければ、つりざおのできあがりだ。ぼくは、

「じいちゃん、えさはこれだよね。」

と言つて、ミミズを見つけて針につけた。実をいうと、ぼくはミミズが大の苦手だ。でも、今日は、弟にいいところを見せなければならぬ手前、泣き言を言つてはいられない。

「あとは、川の中に糸をたらせば、魚がつかれるぞ。」

と、ぼくははり切つて糸を投げこんだ。ものの数分もたたないうちに反応があつた。つれたのはウグイだ。

「すごい。今年も、いっぱいつかれそうだ。やってみろ。」

と、今年初めて、魚つりについてきた弟に、ちよつとえらそうに言つてみた。

「わあ、ぼくでもつかれる。」

と弟は大はしやぎだ。ウグイを針から外すのも、じいちゃんを見様見真似でまねてみるのだが、魚がはねるので、なかなか難しい。それでも、何とか針を外すことができた。弟は、



福井県里山里海湖研究所

「魚がぬるぬるして気持ち悪い。」

と言つて、魚にさわれもしない。ぼくは、頼りがいのあるところを見せることができている気分だ。

二十匹つたところで、今日のつりはおしまいということになり、食べる分の五匹だけをバケツに残して、後は川にもどすことにした。こんなに魚がつかれるとは、思つてもいなかった。自然の恵みに思わず顔がほころんだ。

帰りの山道でじいちゃんはこの話をしてくれた。

「この辺の山の木は、鳥やけもの、それと風が種をまいてくれるんや。雨が多いせいで、人間が手をかけんでも木がどんどん育っていく。大事なのは、よけいな木をまびいて、すきまをあけてやることや。昔は人間がいらん木を切つたで、山はいつもかも、生まれ変わっていたんや。ほやけど、山の仕事がすたれて、木を切らんようになつてもたで、山の木が、きゆうくつになつてもた。山は、人間が手入れをすることで守られてきたんやでの。手入れをせんと、大木ばつかになつて、山に住むけものが食べる木の実をつける背の低い木に光が当たらんで、生えんようになつてまう。そしたら、野生のけものは生きていけんようになるわ。野生のけものが消えたら、そのうち、山の木もあかんようになつてまうんやろな。ほしたら、人間が生きる場所ものうなつてまうかもしれん…」

その話を聞きながら、ぼくは、先生がクマやイノシシの食べ物がないで、里におりてきては、問題になつてい

ると話^{はな}してくれたことを思い出^{おも}した。

「ここも、もうしばらくで、ないようになってまうんかもしれんの。」

とつぶやくじいちゃんのさびしそうな横顔^{よこがお}を見ていたら、ぼくは、思^{おも}わず大^{おお}きな声^{こえ}で力^{ちから}を込^こめて言^いった。

「だれかが手入^{てい}れをすればいいんや。そうすれば、里山^{さとやま}はなくならん。ここもなくならん。」

「だれかがって、だれや。」

と言^いうじいちゃんの声^{こえ}にはっとした。

「それは…。」

(ぼくがやる。) という言^{ことば}葉^のを飲^のみこんだぼくにじいちゃんが、またつぶやいた。

「日本中^{にほんじゅう}から里山^{さとやま}がどんどん消^きえていくんや。そやけど年寄^{としよ}りには、もう時^{じかん}間^{かん}がない。」

(ぼく一人^{ひとり}では、とても里山^{さとやま}を守^{まも}っていくことはできない。)

魚^{さかな}つりを楽^{たの}しんだ谷川^{たにがわ}や美^{うつく}しい田^だの風^{ふう}景^{けい}が、『じいちゃんからの宿題^{しゅくだい}をどうするの』と、ぼくにうった

えかけていた。

● 里山からの自然の恵みを感じたことがありますか。

● 里山を守るために、一人一人ができること何か話し合ってみましょう。

